

菅原 吟治郎 すがはら ぎんじろう
職業安定局
職業紹介等業務担当参事官室職業紹介係

渡久地 まゆみ とぐち まゆみ
人材開発統括官
人材開発政策担当参事官室人材開発政策係



稲田 ちひろ いなだ ちひろ
人材開発統括官
若年者・キャリア形成支援担当参事官室企画係

吉川 輝 よしかわ ひかる
職業安定局
雇用開発企画課企画法令係

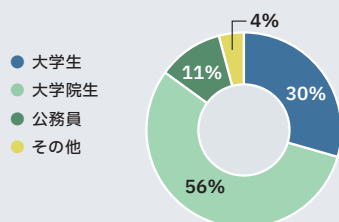
松本 鈴菜 まつもと りんな
職業安定局
障害者雇用対策課雇用促進係

1年目 職員の 座談会 Cross × Talk

不安や期待を胸に人間科学職を選んだ令和8年度入省の皆さんに、入省のきっかけや仕事の魅力についてお話を伺いました。入省9年目までの若手職員を対象に取ったアンケートの結果もご紹介します。
【インタビュー：令和6年度入省 平田】

厚生労働省を志望した動機を教えてください。

1. 入省前は何をしていましたか？



菅原: 私は大学時代、教育社会学を専攻していました。もともとは教育行政に興味を持っていたのですが、就職活動をする中で、自分は困っている人にアプローチするような福祉的機能を行政に期待していることに気づき、そこに携わりたいと考えようになりました。

また、通信制高校に関わる課外活動に参加し、様々な事情や家庭環境の課題を抱える生徒たちと接する中で、そうした生徒たちの卒業後の人生やキャリアを支援したいと思うようになりました。そこで、人生の様々な段階に応じて、一人ひとりの

生活や就労を支える施策を担う厚生労働省に魅力を感じ、志望しました。

渡久地: 私は文化人類学を専攻していました。研究の一環として、多くの方のライフヒストリーを聞く機会があり、その中で、「働くこと」に対するやりがいや葛藤、不安について語る方が多かったことが印象に残っています。

また、私自身が新卒応援ハローワークを利用した経験や、高校でTAとして生徒を支援する活動に2年間携わった経験から、若年者のキャリア形成に関心を持つようになりました。

こうした経験を通じて、働くことに関わる仕事がしたいと考えるようになり、営利目的ではなく公共的な立場から幅広い人の「働く」を支援したいと思い、厚生労働省に魅力を感じ、志望しました。



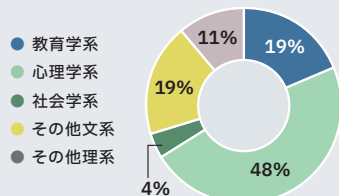
働省に魅力を感じました。



稲田: 私は大学院で臨床心理学を専攻していました。周囲の多くが臨床の道に進む中で、研究や実習を経験するうちに、自分は臨床現場で働くよりも別の形で社会に貢献したいと考えるようになりました。

大学院時代に精神科クリニックで実習を行う中で、働きたい気持ちはあるものの、手当と賃金の関係から復職に踏み出せないケースを目の当たりにし、「制度は本来支援が必要な方々を支えるものであるはずなのに」と、制度に対する問題意識が生まれました。こうした経験から、個人への支援だけでは解決できない問題があり、制度そのものに働きかける必要があるのではないかと考えるようになりました。そして、それができる場所として

2. 大学(大学院)の専攻は何ですか？



厚生労働省を志望しました。

松本: 私も大学院で臨床心理学を専攻していました。

カウンセリングを学ぶ中で、不登校や職場の悩みなど、様々な困りごとを抱える方々への個別支援について学んでいました。特に発達障害や精神障害のある方と関わる機会が多かったです。

話を聞いていく中で、個人の問題というよりも、障害のある方が生きづらさを感じる社会の構造そのものに課題があるのではないかと考えるようになりました。

そのため、個別支援だけでなく、誰もが平等に利用できる制度やサービスを整備することで、より多くの人を支えられるのではないかなと思うようになりました。

当初はカウンセラーや法務省も進路として考えていましたが、「問題が起きた後」ではなく、「問題が起きる前」に支援できる仕事がしたいという思いから、最終的に厚生労働省を選びました。



吉川: 私は大学・大学院で認知神経科学(脳科学)を専攻していました。身近な人がトラウマを抱えた経験があり、精神的な苦痛を抱えた人が、直接恐怖と向き合わなくても苦しみを和らげる方法はないかと考えたことが興味の始まりでした。

厚生労働省を志望した理由は、精神的な困難だけでなく、様々な困難を抱える人に対して、支援や制度の面から幅広く関わることを考えたからです。

就職活動では民間企業も幅広く見ていましたが、営利を目的にするという性質上、本当に支援を必要とする方々すべてにリーチすることには限界があると思い、生涯を通じて人々を支えることのできる厚生労働省に魅力を感じ、入省を決めました。今振り返ると、人が人生の大半を過ごす「働く」という領域に関わることで、

自分の目指していた支援の形に最も近いと考えています。

若手職員に聞いた 「入省のきっかけ」

- 対人支援ではなく制度や政策立案の面からのアプローチが重要だと思ったから。
- 生きづらさを抱える方々を支える「セーフティーネット」としての役割に魅力を感じたから。
- 官庁訪問の際に対応してもらった職員の方があたたかったため。

官庁訪問を通じて感じた印象と 入省後に感じた職場の印象を 教えてください。

吉川: 官庁訪問の時に会った職員の方々がとても温かくて、親身に寄り添ってくれたことが印象に残っています。

そして実際に入省してから、その印象は変わりませんでした。右も左も分からない私たちに対して気さくに声を掛けてくださいますし、的確なアドバイスをくださる上司や先輩方に恵まれています。

また、労働局、民間企業、他省庁など出身も様々で、多様なバックグラウンドを持つ方々とともに働くことで、日々良い刺激を受けています。

菅原: 入省前に思っていたよりも休みが取りやすかったです。周りにも柔軟な働き方をしている人が多くて、育児で時短勤務をしていたり、フレックスを活用していたり、テレワークも結構柔軟に取っているなど感じています。あと、自分の室では今フリーアドレスで固定席がないので自然といろいろな人と関わる機会がありますし、わからないことがあればすぐに相談できます。

人間科学職の先輩方も多く、周囲に働きやすい雰囲気があるので、素敵な職場だなと感じています。

松本: ワークライフバランスの面では、まず休みが取りやすいです。毎月必ず1回は有給休暇を取っていますし、先輩方からも「今月有給取った?」と声を掛けてもらえるので、とても取りやすいです。

私は地方から出てきたこともあって、説明会やOB・OG訪問をほとんどせず、インターネットの情報だけで厚生労働省を認知していました。そのため、かなり厳しい職場を想像していましたが、実際は真逆でした。

稲田: 人間科学職のパンフレットには「と

ても優しくて温かい」と書いてありましたが、「本当かな」と思っていました(笑)。国家公務員は淡々としているという勝手なイメージがありましたが、「自分がそんな環境に飛び込んで大丈夫なのかな」と思っていました。

でも入ってみたら、みなさん本当に普通の人というか、人間味があって温かくて、パンフレットに書いてあった通りだなと実感しました。

平田: みなさん厚生労働省の職場についてすごい極端なイメージを持っていますね。

就活生のみなさんも、決してそんなことないので、安心していただければと思います。

渡久地さんの職場(キャリア形成支援室)は他の部署と比較しても人間科学職の方が多いと思いますが、職場の雰囲気はどのように感じていますか。

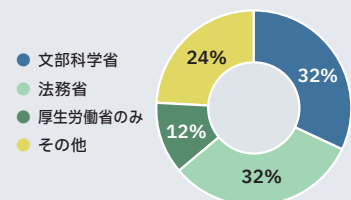
渡久地: 毎朝投稿している「朝メール」をきっかけに仕事以外の雑談をすることもあり、気軽にコミュニケーションを取れるので、とても働きやすいです。

また、困ったことや分からないことがあれば、同期や先輩に気軽に相談できる環境があります。人間科学職は人数が少ない分、横のつながりや先輩との距離の近さを感じており、お互いに支え合いながら仕事ができていると感じています。

若手職員に聞いた 「入省前とのギャップ」

- 思っているよりいろいろな業務がある。(システム系、幅広い政策立案)
- 休みが取りやすい。休暇・休業制度が充実している。
- 話しやすい環境で、様々なことに挑戦できる。

3. 厚生労働省以外に、官庁訪問で 訪問した省庁はどこですか？



実際に仕事して印象に残っている ことややりがいを感じた瞬間は ありますか。

稲田: たまたまSNSを見ていた時に、新卒者の就職率に関するデータが話題になっていて、「このデータは自分たちの職場で



とったものだ」と気付いたことがありました。ニュースで当たり前のように目にするデータも、実際に自分たちが作成や集計に関わっていることを知り、仕事の影響力や意義を感じました。

吉川:入省前、1年目は補助的な業務が中心になると思っていましたが、実際にはかなりスケールの大きい仕事を任せていただく機会が多いです。

また、社会情勢が変化した時に、その情報にいち早く触れられ、それに関わるができる点も印象に残っています。

例えば最近の中東情勢に関連して、国會議員からの要請を踏まえた支援策や助成金の対応に関わるがありました。その際、自分の担当分野で「こうした支援を積極的に実施していく」という動きに携わる中で、国レベルの大きなスケールで物事が動いていることを実感しました。



松本:稲田さんの話と少し似ていますが、告示改正に携わった時が特に印象に残っています。

規模としては、在宅就業支援に関する団体が一つ追加されたという内容でしたが、自分が関わったものが官報など記録として残る形になることに、大きなやりがいを感じました。厚生労働省、国家公務員として働く魅力を感じた瞬間でした。

渡久地:私はキャリア形成支援室で、国家資格であるキャリアコンサルタント制度に関する業務を担当しています。

印象に残っているのは、有識者や大学教授、関係企業の方々が参加する検討会に携わったことです。さまざまな立場からの意見を踏まえながら制度の在り方を議論する過程に関わることで、制度づくりの現場を実感しました。

また、一般の方から電話で問い合わせをいただく機会も多くあります。問い合わせ対応を通じて制度への理解が深まるだけでなく、自分が携わる制度が多くの方のキャリア形成を支えていることを実感し、やりがいを感じています。さらに、先輩

方の仕事に対する姿勢や知識の深さから日々刺激を受けており、自身の成長にもつながっていると感じています。

菅原:私の所属している職業紹介等業務担当参事官室では、都道府県労働局とのやり取りが多く、1年目でもハローワークへ視察に行く機会があります。そうした中で、現場とのつながりを実感することが多いです。

業務を通じて、厚生労働省や職業安定局が全国の労働局やハローワークをつなぐ中核的な役割として機能していることを強く感じます。

好事例の横展開を行ったり、疑義が生じた際の問い合わせ先になったりすることも多く、その業務がなければ全国の労働局やハローワークが困るかもしれないと思うと、責任感とやりがいを感じます。

若手職員に聞いた 「やりがいを感じる時」

- 作成したリーフレット等が現場で運用されているのを見たとき
- 調整を的確に行い、滞りなく仕事が進んだとき
- 自分の携わった仕事が報道されたとき

就活生へのメッセージ・ 大学(院)生、就活生だったころの 自分に伝えたい言葉はありますか。

稲田:「いろいろな経験をしてほしい」ということを伝えたいです。学生時代はいろいろなことに触れて、疑問を持つことが大事だと思います。学業だけではなく、人生の中で様々な経験をして、その中で生まれた感想や疑問が、将来の仕事につながることもあります。大学時代は比較的時間があるので、いろいろな経験をして、たくさんのかんじたり考えたりしてほしいです。

吉川:就職活動は人生の中でも大きな選択の一つだと思います。

だからこそ、たくさんの社会人に会ったり、いろいろな業界を調べたり、面接を受けたりして、自分で納得できる進路を選ぶことが大切です。

今、大学や大学院で学んでいる内容から、「困っている人を助けたい」「誰かの役に立ちたい」という思いを持っている方も多いのではないのでしょうか。

厚生労働省には制度や政策という大きな視点から社会全体を支えると同時に、その影響を一人ひとりの暮らしへ届けられるという特徴があります。

自分がどのような形で、どのような人にアプローチしたいのか、そしてどのように社会に貢献したいのかを考えながら就職活動をしてほしいと思います。

松本:私自身、ももとは心理カウンセラーになるのかなと思っていました。

でも、今勉強していることなどにとらわれすぎず、「自分は本当に何がしたいのか」を素直に考えることが大事だと思います。

また、官庁訪問などで実際に職員の方と会うこともとても大切だと思います。

私は直感も大事だと思っていて、官庁訪問で感じた印象は入省後もほとんど変わりませんでした。

今やっていることだけにとらわれず、自分の直感も大切にしながら頑張してほしいです。

渡久地:私は「興味を持ったことには何でも挑戦してみる」ということを大切にしていました。本当に深く考えすぎず、「とりあえずやってみよう」というスタンスでいろいろなことに取り組んできました。

実は国家公務員試験の前日まで中国で学会に参加していて、帰国してから試験を受けるかどうか迷ったこともありましたが、「とりあえず受けてみよう」と思って挑戦した結果、今があります。

どうしようかと悩み続けるよりも、まずはやってみることが大事だと思います。

やってみないと分からないこともありまし、がむしやに挑戦した結果を後から振り返ることで、自分なりのキャリアが見えてくることもあると思います。



菅原:ここまでパンフレットを読んでくださった皆さんには、ぜひ人間科学区分をおすすめしたいです。

国家公務員として行政の立場から大きなスケールで仕事をしながら、地方研修などを通じて現場の視点も持つことができます。

政策と現場の両方を経験できるのは、人間科学区分ならではの大きな魅力だと思います。

興味のある方、思いのある方はぜひ挑戦してほしいです。